

(第3種郵便物認可)

世界地図を上下逆さにして見たことがあるだろうか。日本列島の上方に太平洋が広がり、その先に米州と豪州が見える。ユーラシア大陸の東端を太平洋の荒波から守るように島嶼弧(とうじょこ)が台湾、琉球から千島へと続く。普段見慣れたはずの世界地図が全く別の地図に見え、さまざまな空想をかきたてる。昔、ロシア人が太平洋に続く不凍港を切望した話さえ、観念的には理解できる気がする。

何が言いたかったかといえは、私たちが常識と考えている、あるいは、無意識のうちに当然と見なしているものも、ひとたび、見方を変えれば、全く別の風景が見えてくるといふことだ。



やまもと たろう
山本 太郎

昆明への旅

今、この原稿をミャンマーやラオス、ベトナムに国境を接し、西にチベットを抱える中国・雲南省の省都、昆明で書いている。標高は1800m。天然の空調部屋。8月と

いつのに肌寒い。

中国を訪れたのは今回が初めてだ。事前の印象や想像の多くは良い意味で裏切られてきた。北京の繁栄ぶりや紫禁城の大きき。しかし、それらは想定範囲だった。一方、想像と全く違っていたものもあった。その一つが、昆明という場所に抱いていた印象。誤解を恐れずに言えば、かなり辺境に近い街というイメージを抱いていた。

私たちは中国と言つとき、日本に近い沿岸部の発展ぶりに目を奪われがちだ。その他の地域を開発の遅れた内陸とみることが多い。ところが、その見方が常識のわな

にとらわれていたことを、昆明が教えてくれた。実際の昆明はラオスやベトナム、タイといった国々から中国西方へ、あるいは上海、北京をはじめとする沿岸部への表玄関だったのである。

昆明の街は私の想像を超えて発展していた。各地からの飛行機はひっきりなしに離発着し、数年後には地下鉄も営業を開始するといふ。北京、バンコクとはハイウェイで結ばれ、大メコン経済圏と深く結びつく。そして相互に発展するというところらしい。私たちの知らないところで人や物が移動し経済が回る。世界は広い。そんなことを考えた昆明への旅であった。(長崎大医学部熱帯医学研究所教授)